

「家がいいね」 第183号

いせ在宅医療クリニック 広報月刊誌

2019. 8. 6

親戚つきあいの範囲

盆も近く亡父母の親戚を考えます。みな高齢になりつきあいの実際は、いとこ世代同士で、それも濃淡があります。つきあいを絞るのは、妻の親戚も同様です。



世間体をどう考えるかは明治以前も、民衆は相手の邪魔をしないことを第一に改めていったのです。民俗学の宮本常一さんの「私の祖父」を読み、昔の人の現実対処にも納得です。世間体や家格にうるさかったのは、当時も村の支配層の考え方だったとのことですね。

ほんとうに「戦後」なのでしょうか

今夏は蒸し暑さも蝉しぐれも、ひとしおですね。敗戦の夏、軍や中央官庁では書類焼却の煙が昼夜昇り、以降その関係者は口を閉ざしたと聞きます。この時代も大切な公文書が、粛々と常套的に廃棄され、煙もたてず人の目から遠ざけられています。権力にとって都合な事実は無かったことにするのが都合、最初から記録できないよう誘導される昨今は、後世から暗黒の時代と言われそうです。個人としての発言は小さいゆえに掻き消されがちです。表現の自由も、一人の人間を尊ぶために必要なのです。賛否両論の場が安全に確保されることは、その前提でしょう。「反日」の大声で、多様性の社会が閉じられていく危惧を感じます。

障害の当事者が国会へ。支えたい気持ちです。

重度障害者の二人が登壇されました。先輩を思い出しました。任期中に末期がん患者となった亡き山本孝史さんが、自らの立場と考えを本会議で表明し、がん対策基本法が成立したのは2006年でした。二人からも弱者が生きやすい社会を求めて欲しいものです。



診察で交わす言葉 3 「この先どうなる？」

「私たちはこの先どうなっていくのか」とは患者さん家族の心の真ん中を占めているのに、実際は聞きにくいものです。互いの話題から避けられ、あやふやな気分ですれ違います。口にもしないままでは対話の場を閉じることにならないだろうか。先の推定が不確実なのは患者も医師も同じ条件です。一緒に考えていく関係が、人生の最終章までつなげることが大切です。そのために入り口はこの言葉を発する所から始まるように思います。

映画のご紹介 進富座

8月24日(土)～30日(金)の期間

72歳の遠藤滋さんは脳性マヒ、一人で生きる自分の居場所「えんとこ」へ多くの支援者を引き寄せています。彼が24日進富座に来てくれます。海水浴の希望を胸に、伊勢真一監督と共にです。



9月の津市での講演会のお知らせ

9月16日(月・祝) 14時～ 有料500円

ひとつも生き物として普通に生きる

生命詩の研究者(中村桂子)と在宅ホスピス医(内藤いづみ)が語り合う



みえ生と死を
考える市民の会

この先の臨時休診のお願い

8月24日(土)の外來、10時半で早めに終わります。お盆休み期間は、8月11日(日)～15日(木)です。



自宅での人生を
最期まで支援します

〒516-0805
三重県伊勢市御園町高向 927
電話 0596-20-8104
ファクス 0596-20-8105

メール homecare@kr.tcp-ip.or.jp
ホームページ <http://isezaitaku.com>

↑バックナンバーはここで閲覧可